校長荒木規夫から保護者・生徒皆様へのメッセージ【不定期コラム№27】R4 5/31

「私の第一声⑮」

【籠球部指導の青春記】

「荒木君、ちょっといいかな？」と呼ばれ、生徒指導部の小部屋に入れられたのは、平成６年４月、貝塚の中学校に教諭として赴任した直後でした。「女子バスケットボール部顧問になってほしい」小部屋の温度を２℃は上げている巨体の部活担当者に迫られました。依頼の形ですが、強制的な雰囲気です。ちなみに、この方は、前三中校長で現善兵衛ランド館長、井出博その人だったのですが。

『冗談じゃない。バスケットボール？　ルールどころか、何人でやる競技かもわからんのに…』私の心は不満で一杯でした。

私自身のスポーツ経験は、貧弱なものでした。小学校では、当時父親が熱中していた硬式テニスをすこしかじりました。中学校では、サッカー部に入部しましたが、万年三軍の上、２年生で股関節脱臼して半年休部しました。高校では、硬式テニス部に入部しましたが、腎盂炎（じんうえん）にかかりこれも半年ちかく休部しました。二浪後入学した大学では、体育会系に入る根性はなく、テニスサークルに入会しました。結果、現状の知識で何とか指導できそうなスポーツは、テニスかサッカーしかありません。

「あのう、テニスかサッカーだったら、何とかなると思うのですが」と提案してみました。しかし、「そこはすでに顧問がおるからなあ…」という反応。今から考えれば、当時は校務分掌の１つという校内の位置づけであり、免許が必要な教科指導ではないのですから、自分の経験を増やすつもりで、どんな部活でも引き受けるべきでした。

しかし、社会人１年目、何が重要なのかもまだよく理解できていない若輩者だった私は、恐る恐る、でも頑固に担当者の依頼を断ったのでした。「じゃあ、とりあえず、保留ということで。もう一度、よく考えてみてな」笑顔の部活動担当者の目の奥は笑っていませんでした。

当時のテニス部とサッカー部の顧問に、「僕を顧問に引っ張ってほしい！」と頼みに行きましたが、みんな渋い顔。サッカー部顧問は、「来てほしいけど、こればっかりはなあ…」と言います。女子バスケットボール部は、前年度３月までの顧問がカリスマ指導者だったので、誰もその後を引き受けたくない状況だったのです。何も知らない初任者が担当するほうが、うまくいくだろうという話が出来上がっていたことを、後で知ることになります。ちなみに、当時のサッカー部の顧問は、現第五中学校長、宮瀧秀一郎その人でした。

断った次の日から毎日、女子バスケットボール部員の３年生４人が、「ぜひ顧問になってほしい」と、頭を下げにきました。しかし、教員として、何が大切なのかもまだよくわかっていない未熟者だった私は、つらそうなふりをして、でも頑固に部員たちの頼みを断ったのでした。

１週間後、教職員の歓送迎会がひらかれました。その席で、転勤した前顧問が、あいさつをしにきてくれました。「君が荒木君か。迷惑かけてすまんなあ。ただ、3 年生の夏の大会が始まるねん。半年後、廃部にしてくれてもいいから、3 年生引退まで、みてやってくれへんか」

全国大会につながる最も大切な大会を直前に控えた部員たちが、僕よりもはるかにつらく、不安な状況であることに、ようやく思い至りました。自分の不甲斐なさを悔やみながら、部活動担当者に「女子バスケットボール部の顧問をさせてほしい」と伝えにいきました。

以後１９年間、部活指導に没頭しました。部活はスポーツではなく教育でした。子どもと私自身を磨く機会であり、子どもと共に過ごす時間は、遅れてきた青春でした。スポーツの経験不足のコンプレックスを、審判や指導者の資格取得で力にかえ、関係書籍を買い漁り、いい指導者やチームに会いにどこへでも遠征しました。結局、泉南地区で初優勝するのに、１０年以上かかりましたが、以降、優勝常連校になりました。今から振り返れば、まさに、青春の日々でした。

私には夢がありました。貝塚からバスケットボールの日本代表選手を出すことです。20 年前、小学校バスケを仲間と共に旗揚げしました。バスケットボールを経験する小学生は、何十倍にも増えました。まだ夢はかなっていませんが、あきらめてもいません。次の 20 年後に振り返れば、今がまさに、青春の日々かもしれませんね。

【不定期コラム№28】へつづく

第三中学校ホームページ では、子どもたちの様子やお知らせなど情報発信しています。ぜひご覧ください。これまでの不定期コラムも「校長室より」のコーナーでご覧いただけます。

http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/